



せきぐち・しろう

## プロフィール

公益社団法人かながわ福祉サービス振興会人材育成グループグループリーダー。介護ロボット推進課長。米国大卒。オリンパス光学工業（現オリンパス）勤務を経て再渡米し、大学院で経営学の修士号を取得。その後、大手外資系企業、ベンチャー企業の勤務後、平成22年度より公益社団法人かながわ福祉サービス振興会にて介護ロボット普及推進事業などに関わる。

## ロボットと共存する将来の介護現場

### ～神奈川の事業を通じてわかったこと～

皆さん、こんにちは。公益社団法人かながわ福祉サービス振興会の関口と申します。私たちかながわ福祉サービス振興会では、平成22年度より神奈川県から受託して介護ロボットの普及推進事業を行っています。

#### 介護ロボットが注目されている背景は？

今、なぜ介護ロボットが注目されているのでしょうか？ その大きな理由の1つが高齢化です。

日本の高齢化率は世界に例をみないスピードで上昇を続け、要介護者も増加し続けています。団塊の世代の要介護者が増える2025年には今よりも約100万人の介護スタッフが必要になるといわれています。また、業績が低迷する製造業ではリストラが進み、ハローワークに行っても仕事がなかなか見付からない人々が多数存在します。そういった人々が成長分野の介護業界にキャリアチェンジすればよさそうですが、さほどシフトが進んでいません。それは、日本の労働市場が硬直化している（キャリアチェンジが容易ではない）上、介護の仕事はきつい、汚い、低賃金などというマイナスのイメージが強いのです。常に人材不足に悩む介護業界において、介護スタッフの負担を軽減するために

期待が寄せられているのが、介護ロボットなのです。もちろん、介護する側だけではなく、介護される側の自立支援などにも介護ロボットが注目されています。つまり、介護ロボットは、介護する側と介護される側の双方の課題解決に期待されているのです。

また、介護分野の課題解決だけではなく、介護ロボットは、新産業を育成するという側面においても注目されています。現に、政府では、新たな産業を作り出すために、成長戦略の一環としてロボット関連技術を介護分野に生かそうとしています。

つまり、私たちは、介護分野の課題解決と、新産業の育成という2つの大きな目的があり、介護ロボットの普及推進活動を積極的に行っているのです。

#### 私たちが取り組んできたことは？

これまでに私たちの事業で取り組んできたことは、大きく分けて3つあります。

1つ目は、すでに市場に出ているロボットをメーカーから借り上げて、それを介護施設に無償で貸し出し、試験的に導入してもらうことです。2つ目は介護ロボットのマーケットリサーチです。現場の介護スタッフや介護施設の経営者に介護ロボットに対するニーズをヒアリングしてきました。そして、3つ目はホームページやイベントなどの情報発信を通じた普及推進活動です。介護ロボットについて何も知らない人々に、興味や関心をもってもらう活動を行っています。積極的に普及推進活動を行った結果、これまで数々のメディアに取り上げてもらいました。

#### 普及に力を入れている介護ロボット

今、私たちが普及に力を入れている介護ロボットの一つにアザラシ型ロボットのパロがあります。パロは、導入することで、利用者の情緒が安定して、表情が和やかになったり、介護施設の入居者やスタッフとのコミュニケーションが増えることがわかりました。ただし、うまく使いこなせないと、効果を実感しにくいかもしれません。

また、HAL®という自立支援や歩行支援をサポートしてくれるロボットがあります。HAL®の利用者からは「徐々にではあるがスムーズに動かせるようになった」「脚を動かすという感覚を思い出させてくれる」などの喜びの声が挙がっています。その一方で、HAL®の装着するには時間がかかるという指摘もあります。

#### 介護ロボット普及推進に向けての課題

世間の介護ロボットに対する認知や理解は明らかに深まっていますが、広く普及されるにはまだいくつもの課題があります。

課題のひとつが、高価格なこと。その理由に介護ロボットというのは、医療機器のように購入するときに国から補助が出たり、利用すれば介護報酬の加算対象になるような制度がまだ整っていないことが挙げられます。

いざ導入した場合、介護施設にとってどのくらいのメリットがあるのかがわかりにくいのも難点です。さらに、介護業界というのは、他業界と比べると何かと規制に縛られており、どうしても新しい挑戦をしにくい体質なのもネックです。下手に介護ロボットを導入して、万が一の事故を心配する事業者も多いのです。

また、産業用のロボットは、工場や物流倉庫などで生産性向上のために導入されています。ところが、介護の現場では行き過ぎた効率化は歓迎されません。介護現場にロボットを導入することで、自分の仕事がなくなってしまうのではないかと危惧する、あるいは、新しい「仕事のやり方」に抵抗を示す介護スタッフも少なからずいます。

さらに補足すると、介護ロボットを作るメーカーと、実際に使う側の間には大きなギャップがあることも大きな課題の一つです。

#### 将来は、介護ロボットと共存する世の中に！

このように介護ロボットの普及に向けていくつもの課題がありますが、介護ロボットがいくら普及しても、無人化工場のような現場になることはないはずです。あくまで主役は人間であって、介護ロボットは人間をサポートする存在であるべきです。双方の役割を認識した上で、介護スタッフとロボットが共存すれば、現場はもっとよくなるはずです。早い時期に介護ロボットが介護現場に導入され、現場の負担を軽減して、高齢者の生活の質（Quality of Life）が向上することを願うばかりです。そうすれば、介護現場が若い人にもっと魅力的な職場になるはずです。



黒岩祐治氏（神奈川県知事）を招いて「介護・福祉ロボットシンポジウム」を開催（2011年11月）



アザラシ型のメンタルコミットロボット「パロ」